

## 令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校B) 報告書 長束中学校

## 1 学校の課題

○医療的ケア、肢体不自由等のある生徒の意思をくみとることが大変困難である場合に、各教科の授業等での配慮の方法や定期テストの受験全般に関する配慮の仕方や該当生徒の意思の判断、提出物や定期テスト等での評価について、これまでも、よりよい方法を模索しながら実施している。今年度は入試も控えているため、これまでの実績を踏まえて合理的配慮について整理し、特別措置についても申請していきたいと考えている。

## 2 研究主題

授業に参加しにくい生徒の困難さを踏まえた授業づくりと評価

## 3 取組内容

○読み書き等の困難さや肢体不自由等のある生徒が在籍する学級で、教科の授業を中心に、合理的配慮の提供による該当生徒の困難さの軽減及び学習課題等の工夫、適切な評価の在り方について研究を行う。

(1) 読み書き等の困難さや肢体不自由等のある生徒 A への困難さの軽減及び取組の工夫

## ・意思の表出

言葉や文字による表現が困難であり、表情等からくみ取る場合も、受け取る相手によって受け止め方が異なる場合があるため、自分の意思で動かせる手指による意思の表出を確認した。タブレットにタッチすることで音が鳴るように設定し、音の有無によって意思の表出を判断した。また、不随意に手が動くとき無関係に音が鳴ることがあるため、不要なときは不織布をはさみ、誤作動防止とした。(図1)



図1 タブレットの利用

## ・書き

タブレットの音によって本人の意思を判断し、代筆を行った。

## ・読み

本や筆記用具を手を持つ、読みやすいように姿勢を変えるなどは困難である。しかし、時に、音を聞いて表情を変えたり、話しかけたことに手指が動いたりなどの反応が見られることから、「聞こえている」と判断できるため、読み上げの支援を行った。また、図や絵などは、本人の目の前に提示できるように、提示用モニターを活用した。(図2)



図2 提示用モニター

## ・発表の取組

事前に保護者にワークシートや発表内容を伝えておき、自宅で記入して持参したものを教職員がグループ内で他の生徒へ伝えた。卒業へ向けての取組として将来の夢や目標を発表する場では、iPadの文章読み上げ機能を利用した。準備やグループ発表では、本人が開設しているホームページの文章を文章読み上げソフトを活用してグループの生徒へ伝えた。また、より本人の思いを発表することができるように保護者の協力を得て本人の将来に対する思いや考えを、読み上げソフトや動画作成ソフトを利用して作成した。こうした取組が、自己表現の手段として活用できると考えている。

- ・面接

学活や授業において、意思表示のツールとしてタブレットのタッチによる回答を利用。あらかじめ面接内容に対する回答の選択肢を用意しておき、面接を行った。時間が限られていることと、これまでの定期試験の取組を踏まえて、回答が無い場合は定期試験の取組同様に2回まで問い直すこととした。

- ・授業の取組

体育の水泳の授業では、本校業務員が作製したスロープを利用してプールサイドまで上がり、プールサイドで水を溜めたバケツの中に足をつける活動を行った。小学校時はビニールプールに入って授業を行っていたが、体も大きくなり水着に着替えると着替えで時間を越えてしまうことから足をつける活動とした。可能な限り他の生徒と同じ場で同じ経験を味わわせるという観点から、活動を絞り、他の生徒と同じように、暑い夏の外の気温やプールの水の冷たさや感触を感じさせることができた。(図3)



図3 スロープの利用

また、ソフトボールの授業では生徒Aにボールが当たっても安全のように、やわらかいボールを使用し、教職員がバットを持つのを補助し、バッターとして参加した。

- ・行事への参加について

文化祭のクラス合唱では特設のスロープ(図4)を設置し、クラス発表時はステージ上に上がり、一緒に並んで発表した。生徒Aのクラス発表時は、場の設定を変更し他の生徒との距離を近づけ、一体感が持てるようにした。他クラスの発表を聞く際も、生徒Aはなるべく生徒の近くで過ごせるようにしつつも、安全の確保と体調管理のため、特別支援教育アシスタント(以下、特アシ)と看護師は離れた位置から見守ることとした。



図4 体育館用スロープ

## (2) 保護者との連携

- ・定期連絡会の実施

中学校、保護者、特アシ、看護師、教育委員会参加による定例会を1～2か月に1回程度行う。

- ・朝の引継ぎ

看護師と保護者の朝の引継ぎに教員が参加することによって学校での活動の確認を行う。複数で話を聞くようにし、後で話の内容を確認することができた。また、毎日顔を合わすことにより保護者との連携も取りやすくなった。

- ・緊急対応について

救急車の要請を想定して、これまで確認していた緊急時対応チャートに加えて救急要請対応時の行動マニュアルを作成するにあたり、看護師に原案を依頼した。それをもとに中学校で救急要請対応時の行動マニュアルを作成した。場所別による対応と救急車要請時に確認される事項を記載した救急要請対応時の行動マニュアルを関係する職員、看護師、特アシに配布し、名札に入れておくこととした。緊急時に救急隊に伝えることや動きを共有した。

## (3) インクルーシブを浸透させるための取組

- ・4月に、看護師による生徒Aのケアの現状や緊急時に教員に手伝って欲しい事の説明の後、生徒Aの保護者から生徒Aの特性やできること・できないこと、保護者の願い等を聞き、生徒Aの理解を深めるとともに、必要な支援について教職員が情報共有した。

- ・生徒向けのインクルーシブについての授業を4月の総合の授業で実施した。一部「配慮がない、平等、公正、環境を変える」の図など昨年度の復習を行い、これからどのような学校にしていきたいのか中学校の願いを全校生徒に伝えた。

・教職員向けのインクルーシブ研修を10月25日に広島大学大学院 人間社会科学研究科 船橋篤彦先生をお招きして実施。話の柱としては①事例を通して「合理的配慮」を考える ②「障がい」について考えるためのワーク ③質疑応答 としての研修会を実施した。

## 4 検証結果

- (1) 読み書き等の困難さや肢体不自由等のある生徒の困難さの軽減及び取組の工夫について
- ・中学校での取組が特別措置願の提出により公立高校の入試でも同等の措置を行える予定となった。
  - ・体育の授業ソフトボールにおいては、ピッチャーが自主的にバットに当たりやすいように前に出てきて緩いボールを投げ、バットに当たったら代わりに走る代走を自主的に名乗り出るなど周りの生徒が自主的に考え行動する姿が見られた。生徒Aがいるからこそその姿を見ることができた。(図5)
  - ・水泳や、合唱の参加では、他の生徒と同じ経験をさせてあげたいと願う生徒Aの保護者にとっても喜ばれた。



図5 ソフトボールの様子

- (2) 保護者との連携
- ・定期連絡会では、保護者の思いをダイレクトに共有することができ、改善に向けて共通理解をしながら何ができるかを模索することができた。また、新しい医療機器の導入や医師の指示書の更新にも、情報共有を行いどのように導入し操作すればよいか等の一連の流れを確認することができて、スムーズに取り組むことができた。
  - ・朝の引継ぎでは、看護師と保護者の健康状態の確認や処置についての話に加えて、学校での活動の確認や、進路についての確認を行うことができた。また、医療機器の変更による指示書の変更時など中学校として確認しておきたいことがある時は、校長も参加して実施し、保護者と共通認識しながら内容を確認することができた。
  - ・緊急対応について  
緊急対応行動マニュアルを作成し、関係する職員、看護師、特アシに配布し、緊急時に伝えることや動きを共有することができた。また、時間計測の重要性から、すぐに計測できるようにストップウォッチを携帯することとした。
- (3) 校内にインクルーシブを浸透させるための取組
- ・教職員向けのインクルーシブ研修では、講師から、現在行っている取組に対して高評価を頂きこれまでの取組を継続、深化させていこうと意欲を頂いた。看護師も参加し、様々な考えを共有する機会となった。また、該当学年以外の教職員もそれぞれの抱えている課題の中で、合理的配慮をどのように合意形成していけばよいか積極的に質問をすることができ、よりインクルーシブな学校へと取組の方向性を共有することができた。

## 5 研究成果

現在、中学校で行っている生徒Aに対する授業及び定期試験での取組を踏まえて、高校入試でも特別措置として実施される方向で進んでいる。学年が上がり、新しいクラスになり医療機器の音が気になると思う生徒が中にはいたが、担任の説明により生徒は理解し、さらには、体育の授業でも提示したように自主的に行動し、他を思いやる姿が多々見られるようになった。